

# 地元の歴史と地方創生

3年5組11番 小平 すばる

## 1. はじめに

筆者が何故地元である天理市の歴史に着目して、地方創生を考えるようになったかという、それは今から7年程前に遡る。

当時小学5年生だった筆者は、考古学者や民俗学者が主人公の漫画を読んでおり、その漫画の主人公に憧れて夏休みの自由研究で天理市の昔話に関する自由研究を行った。その過程で天理市の歴史や奈良県の魅力にも気がつき、いつか天理市や奈良県の歴史に関する自由研究を行いたいと思った。しかし、翌年は別の題材を選び、中学校での自由研究は科学に関するものに限定された。月日は流れ、高校生になった筆者が論文のテーマを決める際にこのことを思い出し、「今こそこのテーマを選ぶ千載一遇の好機ではないか。」と思い、「地元の歴史と地方創生」をテーマに選んだ。

## 2. 序論

近年、地方の人口が減少し、都会に人口が集中する現象が起こっている。これにより地方での出生率が下がり少子高齢化に拍車がかかり、その地方特有の文化や歴史の担い手が危機に瀕している。総務省が2018年に行った国勢調査では、日本の人口は2008年をピークに減少しており、既に日本が少子高齢社会に突入しているのがわかる。

また、地方特有の文化としてよく挙げられる方言も都会への人口流出により徐々に消滅の道を辿っており、ユネスコの消滅の危機に瀕している言語にも幾つかの方言が登録されている。

筆者は、このまま人口減少が続けば、地方と一緒に歴史や文化も消えていくのではないかと考えた。これを防ぐためには、地方の歴史を活用した町おこしをすることによって、地方に対する魅力がアピールされ、人口減少に歯止めがかかり、文化や歴史も保存されるのではないかという仮説を立てた。

そのために、筆者の地元である天理市にある山辺の道を活用し、熊野古道をモデルケースにした、歴史を活用した地方創生の方法を模索し、提案を行なっていく。

## 3. 本論

さて、早速地方創生の提案を行なっていきたいが、まずは天理市の現状と山辺の道の概要について書いていく。

天理市は、奈良県の北中部に位置しており、人口は約6.7万人、新宗教の一つの天理教の聖地であり、市内には天皇陵や江戸時代の武家屋敷が立ち並ぶ歴史ある市だ。人口は1995年をピークに2015年には約1万人程人口が減少している。

天理市の人口の推移（住民基本台帳ベース、日本人住民）



※出典 <https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp010050000001029204/15>

しかし、天理市は天理教の聖地であるため、全国の天理教徒が集まるおぢばがえりというイベントを開催している。このイベントにより人口が減少していても天理市の経済は潤ってきていた。だが、近年の新型コロナウイルスの影響でおぢばがえりが中止になり、以前は活気のあった商店街も寂れてしまっている。コフン広場や芸術村をはじめとする観光客の呼び込みを行なっているが、環境や歴史的景観の保全を十分にしきれていないなどの課題がある。

そこで私が地方創生の要として注目したのが山辺の道だ。山辺の道は全長26km、奈良市、天理市、桜井市に跨る日本最古の道だ。大和朝廷が成立した影響で天皇陵や黒塚古墳をはじめとする古墳群が建造され、奈良時代には平城京と奈良県南部を結ぶ重要な街道として整備された。平安時代になると都は平安京に移ったが貴族達の寺社巡りがさかんになり、江戸時代までは主要な街道として整備され、付近には武家屋敷や環濠集落が築かれた。また、織田信長の弟の一人織田有楽斎が景行天皇陵周辺の保全を命じた記録もある。山口敬太氏の「奈良・山辺の道における景観保全の展開とその保全思想」によると、明治時代以降は日本の原風景として注目を集め、田山花袋をはじめとする多くの作家が山辺の道を紹介した。大正時代から昭和の初めにかけて史跡・古美術への評価が高まり、古墳が注目され、昭和大禮記念事業や紀元二千六百年事業により、周辺の社寺と参拝路が整備された。1935年の雑誌『旅』に大和路ハイキングに関する記事が掲載されたのを皮切りに、戦後になると近鉄によるツアーが生まれ今まで取り上げられなかった景観が注目される。1963年に近畿圏整備法が制定され、三輪～石上間の景観保全が図られ、65年に保全区域に、66年に風致地区に、69年には東海自然歩道構想の奈良ルートに指定された。このように、山辺の道と周辺地域は古代から現代までの歴史と自然が一体となった他に類を見ない古道であり、地方創生の要とするには十分すぎる題材と言えるだろう。しかし、山辺の道を取り巻く現状は厳しいものとなっている。次からは山辺の道の現状について書いていく。

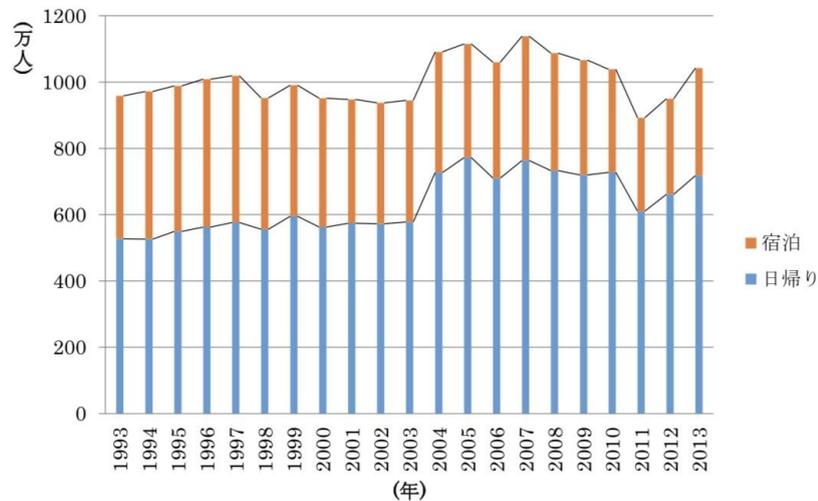
山辺の道は、天理市産業振興課によるゴミ持ち帰り運動の影響で、ゴミの数は少なく、また観光客のマナーも非常に良いため、ハイキングコースには多くの人を訪れている。しかし、全長26kmに渡る広大なコースなため、保全が不十分な場所が多くある。筆者は、スタディツアーで三池炭鉱跡地を訪れた際に、炭鉱跡地が廃業当時のまま残されていたのを見た。なるべく自然な形で、その当時のまま残す保全方法に感銘を受け、山辺の道とその周辺地域の保全も、自然と歴史が調和するような当時の姿のままにしていこうと考えた。そう考えた筆者は、景光天皇陵付近で保全活動をしている山辺の道ファンクラブという団体の存在を知り、取材に向かった。

ファンクラブは、景光天皇陵周辺の草刈りや菜の花の栽培による景観の保全、観光客に対するピーナッツの販売、季節のイベントの開催を行なっている。ファンクラブの活動理念としては、以前は保護されていた里山の環境を自分達で守るというものである。しかし、現状について聞いてみると、次のような三つの問題点が明らかとなった。県や市からの支援がないため菜の花やピーナッツを栽培し、販売して資金を調達しなければ活動することが難しい問題、会員の平均年齢が70歳を超えるという後継者問題、観光客よりも野生動物がハイキングコースまで降りてきてしまうという問題があった。また、山辺の道を訪れる人が、東京や大阪などの都市部からの人が多く歴史マニアやハイキング利用者が大多数で、中には「唯一安心して歩くことができる土の道だから。」という理由で訪れる人も数多くいるということが解った。このような現状に対し、どのような活動を行っているのかということを知りたいため、市の産業振興課商工観光係への取材を行った。

産業振興課としては、ファンクラブをはじめとする団体への支援は現在は考えておらず、観光客が増加したり、保全状況が現在よりも悪化したりすることがない以上支援することはないということだった。また、山辺の道を活用した観光対策についても質問してみると、産業振興課が中心となって運営しているボランティアガイドの会においても高齢化が進んでおり、コロナウイルスによる定点ガイドの増加、外国人対応ガイドの不足といった返答が返ってきた。そして、ボランティアガイドの会における高齢化はファンクラブのものに比べて流動的であるということと、駅からのアクセスは悪くなく直接的な観光客にたいする影響は少ないということ、周辺の古墳や史跡・施設への誘導が不十分であることが解った。以上の取材結果から地方創生と保全への道筋がはつき

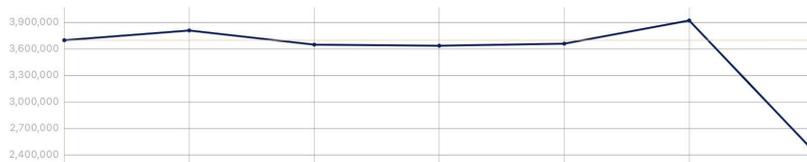
りした。周辺の史跡へと誘導し、ガイドや保全団体を支援し、現在の状況を維持する保全と安全を確保することである。これらを達成するために、和歌山県田辺市の地方創生を参考にしようと思う。

田辺市では、世界遺産に登録された熊野古道を活用した、日本で唯一の道の町おこしを行っている。歴史も非常に古く、周辺の熊野本宮大社や那智の滝などへの誘導にも成功している。田辺市の観光客動態を見てみると、世界遺産登録直後には観光客数が増加していたが、しだいに



減少へと転じている。

※出典「紀伊山地の霊場と参拝道」の世界遺産登録が和歌山県の観光客数に与えた影響について



※上記のグラフは和歌山県の観光客動態(平成26～令和2年版)を基に作成。左から2014年～2020年となっている。

しかし、2012年を境に見事に回復し、コロナ前の2019年には過去最高の390万人が訪れている。田辺市では、市と保全団体が協力してガイドの育成や保全活動を行っており、ガイドの有料化と高い報酬を実施したことで、若い世代のガイドや外国語話者のガイドを増やした。また、難所の安全確保と周辺史跡への誘導のため、標柱の設置を徹底している。また、地域の文化を尊重して活かし、一過性のブームにさせず、継続的に観光客を呼び込むローインパクト化に成功している。このように、市と団体が一丸となって観光地を育てて、継続的に稼ぐことができるようにすることが求められる。

反対に、このような持続可能な観光や地方創生に失敗した地域もある。代表的なものとしては、青森県青森市である。青森市では、2001年に地下1階地上9階建ての中核商業施設「アウガ」が青森市と青森県主導で竣工した。地方創生の目玉として期待されていたが、実際は思うようにテナントが集まらず閑古鳥が鳴いている状況である。木下齊氏の『「地方創生大全」』によると、官と民との間で連携が取れず、官主導で莫大な予算を投じて、一つの観光資源に依存してしまうことが失敗の原因として上げられている。

以上二つの例を元にして、筆者は以下のような地方創生案を提示したいと思う。周辺史跡や施設へ誘導するために、立て看板を設置して人の流れを作り、天理商店街へと人が流れていくようにするために、各史跡・施設を結ぶようにコースを整備する。そして、桜井市や奈良市と連携して、周辺史跡や古墳の保全と野生動物対策の柵の設置を大々的に進めていく。また、複数の保全団体を支援して連携を強化して、官民一体となって保全活動を進め、日本で唯一の「歴史を感じられ、安心安全に歩くことができる土の道」としてPRし、各史跡・古墳に定点ガイドを置くように

する。そして、定期的にガイド講習を20代～50代の現役世代に実施し、地域でも山辺の道と天理市史の教育を実施して、市が主体となってガイドや保全の育成を進めていく方針に転換していくというものである。

#### 4. 結論

以上が筆者が提案した山辺の道を主軸とした天理市の地方創生案である。人口減少社会に突入した日本では、衰退する地方とそれに伴って消滅していく地域特有の文化や歴史を残すために地方創生が必要となっている。そのために、筆者の地元の山辺の道を活用し、熊野古道をモデルケースとした地方創生案を提案した。同じ歴史的景観を持つ道で地方創生を行い、成功している熊野古道のローインパクト化や周辺史跡への誘導、ガイドの育成を山辺の道でも行い、独自のPRを行えば地方創生は十分可能だと考えられる。

#### 5. おわりに

この論文を書くにあたって、初めて筆者が住む天理市の歴史や、山辺の道を知ることができ、地元の問題点などへと目を向けるきっかけとなった。今後、この経験を活かして、地域と山辺の道にさらなる貢献をしてみたいと考えるようになった。最後に、取材に協力してくださった山辺の道ファンクラブの皆様、天理市産業振興課の皆様はこの場を借りて感謝を申し上げる。

#### 6. 参考文献・出典

山口敬太 他「奈良・山辺の道における景観保全の展開とその保全思想」『ランドスケープ研究』2014年vol.7

東洋経済新報社 2016年 木下齊 著『地方創生大全』

角川書店 2016年 桑子敏雄 著『わがまち再生プロジェクト』

池田留巳 「紀伊山地の霊場と参拝道」の世界遺産登録が和歌山県の観光客数に与えた影響について『大阪府立大学経済学部 平成26年度卒業論文』

和歌山県の観光客動態(平成26～令和2年版)

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/062400/doutai2.html> (最終閲覧日2022年10月14日)

天理市観光ホームページ <https://kanko-tenri.jp/history/> (最終閲覧日2022年10月10日)

熊野reborn project <https://sp.yamap.com/kumano/interview01/> (最終閲覧日2022年10月14日)

地域いきいき観光まちづくり100 <https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/kanko100/list.html> (最終閲覧日2022年10月14日)

総務省統計局 <https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1191.html> (最終閲覧日2022年10月10日)

文化庁 消滅の危機にある言語・方言

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/index.html) (最終閲覧日2022年10月10日)